

富士山世界遺産登録2周年記念

浅間大社周辺まちなか史跡めぐり

平成 27 年 6 月 21 日 (日)

集合：浅間大社境内観光案内所前 ・出発 9 : 0 0 ・解散 1 2 : 3 0

— ルート — 1・2・3・4 富士山本宮浅間大社 9 : 10~9 : 40 5 御神幸道三丁目の碑
9 : 50~9 : 55 6 若之宮浅間神社 10 : 00~10 : 10 7 大宮縄状溶岩 10 : 10~10 : 20
8 城山遺跡 10 : 20~10 : 30 9 二之宮浅間神社 10 : 40~10 : 50 10 富知神社 11 : 00~
11 : 10 11 富士山下山仏 11 : 20~11 : 45 12 富士亦八郎重本筆跡の道祖神 11 : 45~
11 : 55 13 吉澤家住宅煉瓦蔵 12 : 05~12 : 20

案内人：富士宮市教育委員会文化課 社会教育指導員 渡井一信

1・2・3・4 富士山本宮浅間大社

平安時代の神社のリスト『延喜式神名帳』(927年編さん)に記載がある古い神社である。火山(富士山)を鎮める水の神としてコノハナサクヤヒメが祀られている。昭和 57 年(1982)「富士山本宮浅間大社」と名称を改めた。

「浅間神社」は富士山をご神体として祀ったことに始まり、祭神には浅間大神(あさまのおおかみ)やコノハナサクヤヒメが祀られることが多い。江戸時代、江戸を中心に富士講が流行したこともあり、富士山麓をはじめ各地に祀られた。富士山本宮浅間大社は、社伝によると大同元年(806)に「山宮」の地から「桜ヶ丘」(現在地)に遷されたという。年号の真偽は別として、山の中腹に祀られていたものがいつごろか山を下りて祀られるようになったと考えられている。

【社殿】

現在の社殿は江戸時代初めに徳川家康が造営したものである。中世には足利氏や今川氏・武田氏により社殿の造営や社領の寄進が行われてきたとされるが、天正 10 年(1582)社殿が焼失したため、慶長 9 年(1604)家康が造営を始め翌々年完成させた。その後幾度か修理が行われ、現在に至っている。

本殿は二層楼閣造で建てられており、この建築様式は「浅間造」と呼ばれている。本殿と拝殿は幣殿によって結ばれている。楼門左右の隨身(ずいじん)像は慶長 19 年(1614)作である。また、楼門前には山宮御神幸(やまみやごしんこう)の際に祭神をよりつかせた鉾を置くための「鉾立石(ほこたていし)」がある。

【湧玉池】

湧玉池北側の溶岩や池底などから富士山の伏流水が湧きだし、池となっている。四季を通じて水温は約 14℃であり、湧水量も豊富である。また、湧玉池は市内を流れる神田(かんだ)川の水源となっている。

【駿州赤心隊之碑】

赤心隊は、慶応 4 年(1868)官軍の東征に応じ、駿河国(静岡県)の神官を中心に結成された。赤心隊は、大宮浅間神社(現富士山本宮浅間大社)大宮司を中心とした「大宮組」、静岡浅間神社神官を中心とした「府辺組」、焼津の神官を中心とした「山西組」からなり、隊長は大宮浅間神社大宮司富士亦八郎重本であった。

赤心隊は官軍を安倍川に迎え、その護衛を務めながら江戸に入った。江戸では官軍指令官である大総督の使い番や大砲隊などとして活躍した。その後、大総督が京都に帰る際赤心隊に同行が命じられたが、帰国を望まない隊員は東京にとどまること許された。40 人程の隊員が安倍川まで同行し、隊を解散し帰郷した。

昭和 7 年(1932)に起きた大宮町大火からの復興を機に、昭和 9 年(1934)町民有志により神田橋のほとり(神田川岸)に建てられた。道路工事のため、昭和 33 年(1958)現在地に移設された。

5 御神幸(ごしんこう)道三丁目の碑

御神幸道*沿いにはかつて1丁(約109m)ごとに「丁目石」が建てられていた。この丁目石には四角柱に「神幸道三丁目」と記されている。ここは浅間大社から三丁目に当たる。

丁目石は同じ規格で作られたと考えられ、丁目石を手がかりに御神幸道をたどることができるが、その大部分は既に失われてしまっている。現在8基確認されているが、元の位置から移されているものが多い。

6 若之宮(わかのみや)浅間神社

浅間神社祭神の第一子(若之宮)を祀る。同じように、「二之宮浅間神社」では第二子(二之宮)を祀っている。ある神社(本宮)の祭神を新しい土地に勧請する際、その祭神の子供(御子神)を祀る場合がある。その際、御子神を祀る新しい神社を「若宮」と呼ぶことがある。

7 大宮縄状溶岩(なわじょうようがん)

縄状溶岩とは、冷えて収縮する際に溶岩の成分とも関係し表面が縄のような形状になったものである。この縄状溶岩は、新富士火山(約1万年前)の噴出にともない流れ出した溶岩の露頭である。

8 城山遺跡

城山公園とその北側を範囲とする弥生時代・古墳時代の遺跡である。平成26年には、公園遊戯施設整備工事に伴う事前の記録保存のための調査が行われ、弥生時代後期の方形周溝墓3基が検出された。

9 二之宮浅間神社

浅間神社祭神の第二子(二之宮)を祀っている。一時社殿が退廃したため浅間大社境内の鏡池東側に遷されたが、大正三年(1914)現在地に再建・遷座されたという。

10 富知(ふくち)神社

「不二神社」「福地明神」ともいわれる。平安時代の神社のリスト『延喜式神名帳』(927年編さん)にある「富士郡三座 倭文神社 浅間神社名神大 富知神社」の「富知神社」に当たるとされる。はじめは現在の浅間大社社地にあったが、そこに新しく浅間神社が造られたため、富知神社は現在地(市内朝日町)に移されたのではないかとされている。鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』文治二年(1186)七月十九日条には福地社に神田が寄進されたことが記されている。また、神社入口には「富知神社」と刻まれた天保3年(1832)造立の石碑があり、近くには甲子(きのえね)や観音菩薩、地藏などの石造物がある。

11 富士山下山仏(富士高砂酒造薬師蔵)

天保元年(1830)創業の造り酒屋である富士高砂酒造には、富士山中に祀られていたとされる仏像が伝わっている。明治初年の廃仏毀釈により、富士山中にあった仏像類は山中から撤去された。富士山から降ろされた仏像類は、市内村山の興法寺大日堂(現村山浅間神社社殿隣の大日堂)に集められたり、当時「中屋」と呼ばれていた富士高砂酒造などがもらい受けたりしたといわれる。富士高砂酒造に伝わる仏像は薬師如来像と菩薩像であり、頂上の薬師堂(現久須志神社)に祀られていた物だといわれている。この仏像は富士山の過酷な自然環境に対応するためか金属でつくられている。

12 富士亦八郎重本筆跡の道祖神

富士高砂酒造の南に「新立(しんたて)町」(現市内西町の一部)の道祖神がある。ここは昔の中道往還(甲州街道)の道筋に当たる。道祖神には「安政五戊午年九月」「和迺部重本書」の銘があり、幕末の浅間神社(現富士山本宮浅間大社)大宮司富士亦八郎重本(和迺部重本)の筆である文字道祖神だと分かる。ここでは神式で道祖神の夏祭りが行われる。

13 吉澤家住宅煉瓦蔵

平成27年3月26日に、国土の歴史的景観に寄与しているものとして、富士宮市初の国の登録有形文化財となった。この煉瓦蔵は明治24年建築の土蔵造2階建である。北側下屋や主体部の内側には煉瓦を設けている木骨煉瓦工法とみられる。明治期に当地に盛んに建てられた煉瓦蔵の希少な遺例である。